

# 大崎ひまわり訪問看護ステーション

症例概要 利用者 : 70代後半 女性 要介護2

利用期間 : 平成30年5月 ~ 令和4年6月末にて全サービス終了

経過 : 平成29年12月左尿管腫瘍にて尿管全摘手術後、自宅退院する。この頃より、精神的に非常に不安定で、抗不安薬や抗精神病薬の処方を受ける。徐々にむせや嚥下困難が出現し、平成30年5月中旬、るい瘦著明で栄養管理が必要となり再入院、経鼻経管栄養開始となる。下旬に退院となるも、手技獲得援助・清潔援助のため訪問看護師導入、その後、嚥下機能改善目的のため言語聴覚士介入となる。

## 内 容

病前は社交ダンスに励み、ご友人と外出してはおしゃべりに花を咲かせと、余暇を楽しんでいた。そんな時の突然の病気宣告。手術は成功したが、精神的に不安定になり、毎日死ぬことしか考えず抗不安薬や抗精神病薬を内服していた。極度の体重減少から、誤嚥が多く経口摂取不良で、るい瘦も著明となり経管栄養となったが、セルフケアもままならず退院。訪問看護介入となる。

退院時に主治医から「一切食べてはダメ」と言われたものの、ご本人から「モンブランが食べたい」夫も「口から食べさせてあげたい」という強い思いに動かされ、主治医に打診し言語聴覚士介入となる。介入当初、少しでも形のある物は拒否が強く、蜂蜜から開始しゼリー摂取可能となった段階で主治医へ相談し、B病院嚥下外来での評価を基に連携し訓練を進めた。

また、介入当初から、1分と座って居られず、階段を1日何十往復もし、眠れないとエチゾラム過剰摂取していた為、看護師は薬管理、胃瘻管理、入浴介助を行いながら、精神的不安解消の為の傾聴を続けた。精神状態は徐々に上向き、今年のお正月には、連日ビールを飲み、お雑煮を食べ、退院時30キロ台だった体重は、18kg増加、令和4年5月には胃瘻を抜去出来るまでに回復。

あの時は、病気だったんだよねと振り返る利用者さん。今では、お化粧をし、明るい洋服をまとい、同級生やご友人とのランチを楽しみ、ある時は近所の認知症のおばあさんの話相手となり、カレンダーが真っ黒になるほど活動的。

「今が一番幸せ!だって自分の事が出来て、友達と遊びに行ったり、好きなものが食べれるんだもの」「楽しみは自分で見つけるもので、待っていても来るものではない」「とにかくこの4年間を取り戻したいの」と満面の笑みで語る利用者さんは4年前に出会った方とは別人。

令和4年の夏をもってケアマネ、看護師、言語聴覚士全ての介護サービスは卒業となった。4年に渡る介入で要介護2⇒要支援1に改善、病前の活発力を取戻し輝く日々を取り戻した症例となります。